# 兵庫・宮内堀脇遺跡

1　所在地　兵庫県出石郡出石町宮内字堀脇

2　調査期間　一　第二次調査　一九九六年（平8）一一月～一九九七年三月

二　第三次調査　一九九七年一〇月～一九九八年二月

3　発掘機関　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

4　調査担当者　西口圭介・岡本一秀

5　遺跡の種類　武家屋敷跡・水田跡

6　遺跡の年代　弥生時代後期～中世末

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

宮内堀脇遺跡は、山名氏宗家の居城であった此隅山城跡の西南の山裾から一段下がった水田部分に位置している。山側には入佐川を挟んで「御屋敷」と呼ばれる居館推定地が存在する。

（出　石）

調査は一九九五年度より実施しており、これまでに武家屋敷跡に伴う礎石建物・土塁・堀などを検出している。

第二次・第三次調査においては弥生時代後期から幕末に至るまでの遺構・遺物を検出したが、主なものは前年度に引き続き、此隅山城の武家屋敷に伴うものである。

遺構では前年度の調査区からのびる戦国時代の堀・土塁・礎石建物、鎌倉時代の水田畦畔、平安時代の人形や斎串が流れ込んだ水田、弥生時代から奈良時代にかけての田下駄や加工材が多量に入った水田が検出されている。

検出された堀は一本であるが、堆積によって大きく二時期に分けられ、上層を第二次調査ではSD八〇〇一、第三次調査ではSD四〇〇一と呼び、下層を第二次調査ではSD九〇〇一、第三次調査ではSD五〇〇一と呼称している。

遺物では、木簡のほか、人名を墨書した多量の土師器皿、中国製陶磁器、鍍金された陶器片、鉄砲玉、金銅装の小柄や鉄製の犂先などが出土した。戦国期より下層からは祭祀遺物が出土している。

このうち人名墨書土師器皿は、第二次調査・第三次調査にわたって上下層の堀より出土している。数度にわたって堀に投棄されたもので、時期は天文年間の末期から永禄年間の初期と考えられるものである。二〇〇点以上出土しており、そのなかには「たうゆふ」「めうきん」「めうかう」「めうしん」「めうしゆん」「ほうせい」

「そうかう」「そうけん」「寿けい」「とうひやうへ」「又六」「とらちよ」「おかめ」など三〇名以上の名が見える。同じ宮内地区にある総持寺観音堂の本尊、十一面千手千眼観世音菩薩像には、天文四年（一五三五）に造立された際、胎内に「惣持寺本尊造立勧進奉加帳」が納められている。奉加帳には、山名家当主である山名祐豊から武士・神官・僧侶・農民など幅広い階層の人々の名がのべ一五〇〇名以上も書かれており、そのなかには「道祐」「妙金」「妙心」「妙春」「藤兵衛」「又六」「虎千代」「おかめ」などの名が見える（出石町『出石町史第三巻（資料編Ⅰ）』一九八七年）。二〇年程の時間の開きがあるが、同じ宮内地区のなかでもあり、墨書土師器皿の人名と同一人の可能性は高いものと考えられる。これらの墨書土師器皿は追善供養に伴って使用されたものと考えられている。

8　木簡の釈文・内容

一　第二次調査

**土壙内側**

(1)　・「帰本　道祐禅門霊位　」
　　・「天文廿三年七月廿三日」　255×66×7　061

(2)　「ほうきい」　120×160×2　061

(3)　「そうきん」　190×246×2　061

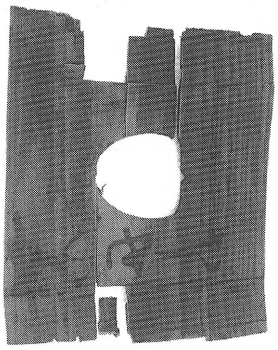
(4)　・「銀将」
　　・「竪行」　31×22×12　061

**土壙上**

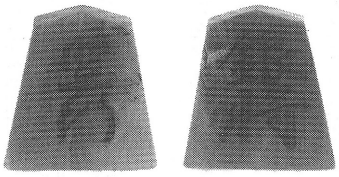
(5)　百之ひしやく　(186)×24×10　081

**堀SD九〇〇一**

(6)　「そうかう」　143×286×2　061



一(2)



一(4)

**堀SD八〇〇一**

(7) ・「〈　　198×29×5　032

一斗□□〔しちカ〕□□」

〔二升カ〕

・「〈　　」

**遺構外**

(8) 「□□〔廿廿カ〕□□九

三□五六七八」　336×49×5　011

(9) ・「〔ウーン〕見我身者発菩提心門我名

聴我説者得大智恵智我□

・「〔バンキリーク〕南无阿弥　(295)×57×2　019

**鎌倉時代水田土壌**

(10) 「　鬼鬼鬼

（符籙）尸尸鬼鬼鬼〔尸鬼カ〕

鬼鬼鬼□□　(128)×45×6　019

(1)～(4)は土塁の内側（武家屋敷内）からの出土である。

(1)は位牌である。近接して重ねられた土師器皿が出土しており元の位置からは動いていないものと考えられるが、土坑などの埋納遺構は見つからなかった。白木製で、圭頭状の頭部をもつ札型牌身に長方形の板状台座がつく。ここに記された「道祐禅門」は人名墨書土師器皿にある「たふゆう」、「惣持寺本尊造立勧進奉加帳」にある「道祐」と同一人である可能性が高い。また、袴狭遺跡の一九九三年の調査で、戦国時代の仏堂（三間堂跡）より出土した卒塔婆にも「道祐禅門」とある（本誌第一六号）。

(2)は三宝の脚部の外側面、宝珠形の透かしの横に墨書されている。「ほうせい」の墨書は人名墨書土師器皿にもある。

(3)は折敷の内面に墨書されている。

(4)は将棋の駒である。表面には「銀将」、裏面には「竪行」の墨書が達筆で書かれている。裏面が「竪行」であることから、「中将棋」の銀将と考えられる。

(5)は土塁上より出土した。形状及び文言からみて杓の柄に記された可能性が高い。

(6)は折敷の内面に墨書されている。「そうかう」の墨書は人名墨書土師器皿にもある。

(7)は上端の左右に切り込みを入れた付札である。他端は丸くおさめている。

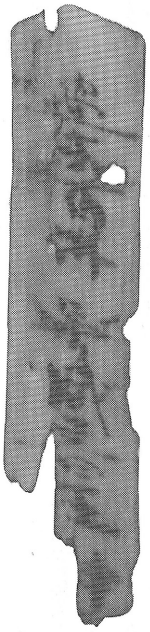
(8)は堀の外側の一六世紀後半の水田土壌より出土した。(9)は堀の外側の一六世紀中頃の水田土壌より出土した卒塔婆である。(10)は呪符木簡である。

## 二　第三次調査

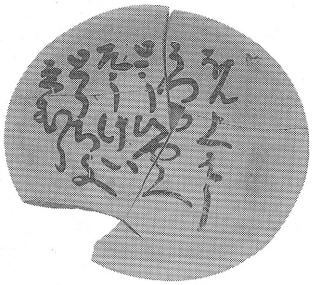
**堀SD四〇〇一**

一(9)

一(10)



二(1)



（参考　墨書土師器皿）

（木簡は赤外線画像）

(1)　「過去有仏号威音王神×　(124)×27×0.5　019

**堀SD五〇〇**

(2)　「上　(126)×263×3　061

(3)　「計
ゆ
け
い　(90)×(103)×1.5　061

(1)は堀の肩部より人名墨書土師器皿とともに出土した。柿経の一部である。『妙法蓮華経』常不軽菩薩品第二十（『大正新脩大蔵経』第九巻五一頁）の文言を記したものである。

(2)(3)は堀中より人名墨書土師器皿と共に出土した。(2)は折敷の底板である。外面中央に墨書されている。(3)は三宝である。脚部の外側面、宝珠形の透かしの横に墨書されている。

木簡の釈読については奈良国立文化財研究所の舘野和己氏・吉川聡氏・馬場基氏、兵庫県立歴史博物館の小林基伸氏のご教示をいただいた。

## 9　関係文献

兵庫県教育委員会『ひょうごの遺跡』二一（一九九六年）
同『平成八年度　年報』（一九九六年）
同『平成九年度　年報』（一九九七年）

（西口圭介）